

次元形容詞の多義性についての日中対照研究：日本語の三次元形容詞「太・細」，「厚・薄」，「大・小」と中国語の三次元形容詞〈粗・細〉，〈厚・薄〉，〈大・小〉を中心に

趙，寅秋

<https://doi.org/10.15017/1522372>

出版情報：Kyushu University, 2015, 博士（比較社会文化），課程博士
バージョン：
権利関係：Fulltext available.



氏名	趙寅秋			
論文名	次元形容詞の多義性についての日中対照研究 —日本語の三次元形容詞「太・細」、「厚・薄」、「大・小」と中国語の三次元形容詞〈粗・細〉、〈厚・薄〉、〈大・小〉を中心に—			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	松村 瑞子
	副査	九州大学	教授	山村 ひろみ
	副査	九州大学	教授	井上 奈良彦
	副査	九州大学	教授	松永 典子
	副査	麗澤大学	教授	井上 優

論文審査の結果の要旨

認知言語学の発展と共に、我々の概念体系の根底を成すとされる「概念メタファー」と「プロトタイプ・カテゴリー」が提唱された。この体系に基づき、言語表現の多義性に関する研究が数多く行われてきた。これらの研究では、空間関係概念を表す語を用いて非空間関係概念を捉えるプロセスが解明された。しかし、先行研究の殆どは、方向概念を表す語の多義性を中心に行い、次元形容詞の多義性についての考察はまだ少ない。そこで、本研究では認知言語学の視点から空間関係概念の一種である次元概念を表す次元形容詞に関する多義性研究を行い、空間関係概念で非空間関係概念を捉えるプロセスにおける日中両言語の共通点および相違点を対照分析した。

第1章では、本研究の意義及び構成を紹介した。第2章では、先行研究を概観し、その問題点を指摘した。第3章では、本研究のデータ収集方法および研究方法を概説した。

第4章では、日本語の「太・細」と中国語の〈粗・細〉の多義性を、語彙レベルと概念レベルから対照した。語彙レベルでは、以下の点が明らかになった。①「太・細」はメタファーリンクを介する意味拡張が多いが、〈粗・細〉はメトニミーリンクを介する意味拡張が多い；②「太・細」と〈粗・細〉のいずれも、対の中で非対称的であることが多かった；③プロトタイプの意味は同様であるが、拡張的意味では「太・細」と〈粗・細〉はかなり異なっていた。一方、概念レベルでは、①「太・細」と〈粗・細〉は同様に、空間関係概念群から非空間関係的な概念群へ写像されている；②「太・細」は「状態」という概念群へ写像されるのに対し、〈粗・細〉には同じ写像がないことが分かった。

第5章では日本語の「厚・薄」と中国語の〈厚・薄〉の多義性を対照分析した。その結果、語彙レベルでは、①「厚・薄」と〈厚〉はメタファーリンクを介する意味拡張が多いが、〈薄〉はメトニミーリンクを介する意味拡張が多い；②「薄」の拡張的意味はかなり発達しているが、中国語の〈薄〉ではあまり拡張していない；③「厚・薄」と〈厚・薄〉は同じように、非対称性が見られた。一方、概念レベルでは、①「厚・薄」と〈厚・薄〉とも空間関係概念群から非空間関係概念群へ写像されている；②「厚・薄」と〈厚・薄〉は写像された概念群はほとんど同じであったが、それぞれ「厚・薄」の場合「度合」への、〈厚・薄〉の場合「質」への独特の写像が見られた。

第6章では日本語の「大・小」と中国語の〈大・小〉の多義性を対照分析した。語彙レベルでは、①〈大・小〉はメタファーリンクを介する意味拡張が多いのに対し、「大・小」はメトニミーリンクを介する意味拡張が多い；②「大・小」と〈大・小〉では非対称性が顕著ではない；③独特な拡張的意味が見られる。一方、概念レベルでは、「大・小」と〈大・小〉は同様に①概念群間の写像

が見られ、②同じ非空間関係概念群へ写像されている、ということが判明した。

第7章では、日中両言語の三次元形容詞の非対称的言語表現を取り上げ、非対称性の要因を考察した。その結果、①非対称性は必ずしも有標・無標で解釈できない；②背景知識が異なるため、異なる知識が活性化されることによって非対称性が生じる；③我々に内在化された自然法則に反するものは言語化されず、それが非対称性の原因になる可能性がある；④表されている概念に段階性があるか否かということも言語表現が非対称的になる要因の一つである、ということが明らかになった。さらに、日中両言語の三次元形容詞における非対称的表現の機能に関して考察した結果、語彙レベルで非対称的であるが、概念レベルから見ると同じ概念メタファーから成り立つものであり、語彙レベルの非対称的表現が相互に補完しあうことで、概念群をより多面的に表現するのに役立っていることを明らかにした。

第8章では、本研究の内容をまとめた上で、今後の課題を述べた。具体的には、本研究では日中両言語の三次元形容詞の多義性を中心に考察を進めたが、今後、一次元形容詞、二次元形容詞の多義性はどのような特徴があるか、また、それは三次元形容詞とどのような関連性があるかなどについての研究が大きな課題になることを述べた。

本研究の意義は、次元概念を表す次元形容詞の多義性を日中両言語の三次元形容詞を中心に、より体系的かつ多元的に分析することによって、直接に捉えることができない概念を柔軟に理解する仕組みを解明するとともに、空間関係概念を経由して非空間関係概念を捉えるプロセスについて、新しい視点から解釈した点である。さらに、本研究で出された結果は、取り分け日本語教育、中国語教育において有用なものになると期待される。よって、本研究は博士（比較社会文化）の学位に値すると判断した。